

Title	書評を兼ねて
Author(s)	深瀬, 基寛
Citation	英文学評論 (1954), 1: 181-187
Issue Date	1954-03
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/RevEL_1_181">https://doi.org/10.14989/RevEL_1_181</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 書評を兼ねて

深瀬基寛

われわれ同様の機関雑誌が発足することになったので何かひとつ新稿を構えたいと思いつきながら、例によつて思いつきだけで物にならず、旧稿を取り出して見たが、これは雑誌の原稿には冗漫に過ぎるようなので、近ごろ折にふれて通読した内外の書物の書評を書かしてもらふことにした。ところで、さて何か取り上げようとして机に向つてみると、元來、甚だしい健忘性である上に、メモやノートをとる習慣がついていないために、多少でも突のあることを言おうとすると、も一度片つ端から読み直さなければならぬ気がして、書評ということもなみたいいていの仕事ではないことに今さら気がついた。かつて成瀬無極先生から承つたところによると、先生は講演の壇上に立つ前には必ず一杯を引つかけないとうどうにも舌が廻らないとお話であつたが、ものを書く場合でも気の弱い人間はさんざ前口上を述べておかないと容易に本題にはいれないものらしい。そこで思いついたのが書評の弁である。つまり review of reviews だ。

書評を兼ねて

近ごろ二三度新聞に書評を書かされた経験に照してみると、新聞の書評はたいへい原稿紙一二枚程度に限られているので、前口上はおろか、前々口上くらいでぶつくり切れてしまう。つまり普通の広告文に、ただ評者の人名がくつついていただけのことである。訳書の書評などになると、先ず、原著者を讀め、訳者に一行くらいコメントを進呈して後に、内容項目を並べ、読者に一読をすすめただけでも紙が切れている。図書新聞や読書新聞のような書評新聞でさえも全紙の半分はその程度の記事で埋つている。「タイムズ文芸附録」のような書評機関をもつてゐる国は羨ましさを通り越して憎くたらしいくらいだ。

ところでイギリスはまたイギリスなりに近年の書評の傾向に不満をもつてゐる者もいると見えて、例へば C・D・ルイスの *A Hope for Poetry* のなかにこんなことが書いてある。なかなか面白い意見である——批評というものがこのようにちぐはぐになつた原因としてわれわれはエッセイという文字形式の衰微を挙げる事ができるであろう。相当のすぐれた作家たちがひとつの文字形式としてのエッセイを使用していたころには、比較的才能に乏しい大多数の作家たちにとつてはこの形式はただ彼等自身の自我に風を通すくらいのお機会というほどの意味しかなかつた。エッセイというものの人氣が降るに従つて、才能の乏しい作家はこの形式を見捨てて、群をな

してわが定期刊行の雑誌類の批評欄へどやどやと降りてきた。その結果として、もはやそこには批評の代りに、長たらしい自己陶醉的な繰り言や、当面の問題になつてゐる書物を抜きにしたらその他は何でも天下に御法度なしという「月評家」の私見や、評家自身の臆面もない鼻自慢や、文壇の噂ばなしや、まるでデパートの案内男のゼスチュアをつくりの露出症的な機械的な一種の批評様式が現われることに相成つたのである。かんじんの作家の作品はどこまで行つても道具であり隠武者であり、ともかく当の批評家の自我を引き立たせるためのだしに使用されているに過ぎないのである――

かういわれてみると、耳のいたいののはわれわれ日本人も御同様である。さきに述べた短評は別としても、多少いいねいな長文の書評でもこのルイスの批判眼のお目こぼしにあづかることは容易でない。姐上にある本のこととは猫に喰わしておいて、作家の噂ばなしか、作家と評家が温泉で混浴したとき胸に毛があつたかなかつたとか、もしもその類のはなしでなければ必ずどこかに評家自身の鼻自慢がかくれている。よく見ても日本の文学論は七分通りまで作家論で、九分九厘まで人物評である。アタツチメントとデタツチメントの概念を適用すると、日本人くらい喰いつくことの好きな国民は珍らしからう。喧嘩もまた喰いつくことの一つである。地獄の敷石が口裏で固まつているやうに、文壇御所の床板はニカワ張りで出来て

いる。朝日新聞に日本の現代詩人の批評が連続的に載り出したことを殊勝な現象として眺めていると、いかにして秋桜子が虚子に反旗をひるがえしたか、唐木順三がいかに家庭円満であり、但し子供がなくて淋しいらしいとかいうはなしばかりである。何と噂のすぎな国民だろう。日本語は膠着語だというのが、それなら日本国民もたしかに膠着国民に相違ない。

批評に関してデタツチメントの大切なことを説いたのは周知のごとくアーノルドの批評論だが、この言葉の含む充分な意味へ、いま上にのべたやうなわれわれの卑近な体験から接近してゆくことも英文学研究の一つの道ではないかと思う。一面からいえば無理もないはなしだが、従来の行き方にはどうも英文学とわれわれの体験とのあいだに開きがあり過ぎるやうに思われる。その開きは文化の質と質とのあいだの開きであつてみれば、さう注文通り縮るわけのものではないが、他面において従来の行き方が科学的研法に規準することに急で、英文学研究というものがどうもわれわれの体験の上に乗り移つてこないやうらみがあつたやうだ。この傾向が最近、故、中島敦のステイヴンソンへの打ち込み方や、福田恒存の批評や木下順二の創作などで見ると少しづつわれわれの注文通りの方面に近づきつつあるやうな気がする。英国研究の機関紙「あるびよん」も最初はどうやらビフテキ食談になりそうなる心配があつたが、最近には

ロンドンのピフテキの味を知らない者にもいろいろ思想上の滋養物を提供してくれるのは有難い。この雑誌がひろく文化的な見地からわが国の英文学研究の業績を取りあげて論評する書評欄の方面にさらに数倍の努力を払うことを切望したい。これは雑誌ではないが詩の機関誌「荒地」の同人には英文学出身の詩人が多いらしく、英詩の精神がこの機関を通して日本の詩壇に流れこむ可能性に希望を托したのである。最近特に注目されることは一般に詩への要求が日本の読者のあいだに急劇に高まつてきたことである。最近まではフランス小説の流行にならつて英文壇からわれわれの求めるものが英国の小説であつたようだが、明治のロマン派の日本詩人がイギリスのロマン主義から学んで以来絶えて久しかつた英詩への要求が、この機運に乗じて再開されることを切望してやまない。

前口上はいい加減に切りあげて、さて最近おびただしく出版される詩書のなかから何げなく取り上げて、つい読まされてしまったのが J. Isaacs: *The Background of Modern Poetry* (Based on *Broadcast Talks*) 1951 Bell だつた。放送のせいでもあろうが、極めて息のみじかい軽快な文章で、どこかに E. M. Forster のエッセイをもひとつ若くしたようなところがある。面白いと思つた点を挙げると、先づ従来の文学史の教科書が詩でなくして詩人を中心として年代記的な配列になつている点に抗議していることだ。詩の

時間は年代記とは全然別のパースペクチヴで捉えなければならぬ。いわば詩の製産者の立場からでなくして、消費者の立場から、詩を生きて動く現在の連続として捉えなければならぬという、この考へはパウンドやエリオットの影響であろう。エリオットについて一章を別に設けてあるが、そのなかに一九〇五年十六歳半の少年エリオットの詩が紹介されているのも面白い。The Coming of the Image という章では現代詩とイマジズムの關係を取扱つているが、そのイマジズムに W. E. Henley の影響のあることを注意してある。昔、ヘンリーのことを厨川先生から教わり、一時熟をあげた記憶があるのでこの点も面白かつた。最後の章にこんな意見が述べてある——「逆説的な言い方だがすべての詩は結局せんじつめてみるとみな詩についての詩だ」という意見がある。それも芸術至上主義の意味でいうのでなく、詩人というものがこの世界に生れてきた根本の理由はこの世界を詩のかたちに作りかへることにあるのだから、何をテーマにして詩作しようとも、詩作の作用そのものがつねに詩を語りつつあるという意味である。何げないこんな暗示的な言葉からどんな面白い文学理論が出てこないとも限らない。この本は分量は百頁に充たないが、いろんな暗示に富んでいる点で珍重されていいと思う。

Vladimir Weidle: *Russia Absent and Present* 1952 John Day

New York

同じ著者の *The Dilemma of the Arts* を訳した興味から英文学と直接の関係はないが、この本も実に面白かつた。この本は続刊を予告されている「ヨーロッパの構造」と「英国的価値」と相俟つて三部作になるという。そのことから察せられるように、これは単にロシア文化の国史的研究という性質のものではなく、ロシア文化が一般西欧文化の一環として捉えられているところに特色がある。すでに「芸術のデレンマ」でも明らかのようにこの著者の西欧文化の歴史への知識と批判力には驚嘆すべきものがあるが、やがて現われるであろう「英国的価値」も同じ観点から英国文化を批判したものであらうと思われるので、われわれには特に待望される次第である。さしあたってこのロシア文化論は単に年代記的な教科書風な文化論ではなく、時代を追いながらも古代ロシアは第一章で終り、ピーター大帝によつて建設された近代ロシアと共産革命によつて生れた第三ロシアの本質が中心問題として実に鮮明に記述されている。結局ロシア精神の発展史といつてもいいが、しかしベルヂアエフの記述と較べると形而上学的というよりもやはり歴史史的である。アンリ・マシスの純西欧主義的立場からすれば、ロシアはもちろんドイツまでも半東洋的であり、トインビーはロシアの本質にビザンチウムの全体主義の影を見ながらも、ロシアの本質はやはり西

欧の代表者フランク人衝撃に対するロシア人の反応であるという点に重心を置いているように見える。しかしウェイドレの立場は、古代ロシアがヨーロッパから分離されたのはビザンチン文明のためではなく、むしろそのためにロシアはヨーロッパ文明の一部だといふのである。それはビザンチン文明といへどもそれは原始キリスト教の東方的形態であるという限りにおいて、ヨーロッパとロシアとのあいだに窮極の完全な分離はあり得ないからである。現にトルストイやドストエフスキーが代表するようなロシアの精神の精髓ともいふべき敬虔主義はスラブ魂の顕現である以上にキリスト教精神のロシア化だといふのである。この本の面白味はこの立場の形而上学的立証ではなくて、この立場から一つ一つのロシア的現象を分析するその具体的な味にある。それらの点を列挙すれば限りはないが、一つだけ例をあげると、われわれにはあまり知られていないと思われる事実として、共産主義革命の直前に出現したロシアの文芸復興(著者はこれに *Silver Age* という名称を与えている)である。これはチエホフ時代の暗い絶望時代の次に現われた現象で、その代表者たちの名前もわれわれには未知の人名が多いが、とにかくこの気運によつて発生したロシア文化の再生はその水準からいつてヨーロッパのどの国の文化的水準と較べても決して第二位に下るものではなかつたといふ。それが共産革命のわずかに十ヶ月の時間で救うべ

からざる反動に転落したのだという。

ロシアに關するわれわれの知識はこれで見ると恐ろしく偏局したものである。とにかく西欧文明を中心として考える場合、進歩と反動の急劇な交替が近代東洋の宿命であることはトインビー史觀の教えるところだが、この切実なわれわれの課題への参考としてこの本は是非とも邦訳されるべきものではないかと思うのである。

*The Power of Caritas and the Holy Spirit* by M. C. D'Arcy  
筆者にとつて昨年の大きな収穫はダーシー博士の講演を聴きまた直接お話を承るることによつてかねて書物学問を通しておぼろげに感じていた English scholarship というものの実態をまのあたりに知ることができたことであつた。学問というものがあれほどの熱情と誠意を以て人間的に生きていくということはたいへんなことではなればならぬ。この本は直接英文学とは無縁のように見え、またチユーリッヒで発行されている "Erano-Jahrbuch XXI" という評論集からの抜き刷りで、来邦記念として著者から贈られたものなので、この書評欄に書くのもどうかと思つたのであるが、別にさういうことに拘泥しなくてもいいであろう。

この本は「愛の分析」といつてもよく、博士みずからが快心の著といわれた *The Mind and Heart of Love* と内容上繋りのあるものであろう。かつて西田博士も推賞された Nyrgen の *Eros and*

書評を兼ねて

Agape の批判から出発してゐるのであるが、ニルゲンが人間的愛と神の愛とを峻別したことはそれだけの必然性があることを認めながらも、博士の分析は愛の諸段階にはるかに精緻な識別を試み、ホプキンズの詩から資料を求めたりして、その分析そのものが愛情に溢れたものである。だいたい「聖靈」などという問題はもうわれわれとは無關係な神学上の特殊問題と一見考えられるが、唐木順三氏が「詩とデカメン」のなかで引用してゐる Zissel の *Die Entstehung des Geniebegriiffs* & Logan Pearsall Smith の *Four Romantic Words* などの研究によつてみるとわれわれが多少でも文学精神の問題に考えを及ぼす限り、直ちに「風」とか「靈」とか「魂」とかいう問題に突つかることを発見する。そうして今もなほ詩の精神と宗教的精神とがいかに密接してゐるかに驚かされる。われわれの文学的概念が浅薄な合理主義的偏向によつていかに曲められてゐるかに驚かされる。その意味でこの本は文学の反省のための一助となることはたしかである。また動物愛とか性慾とかいう現象と聖靈というものが頭のなかで矛盾的に感じられたり、結びつかない人はこの本を読んでみると全く別の世界を開かれるであろう。も一つこの本を読んで考えさせられたことは、愛そのものに emergent evolution ともいふべき事実の存在することだ。一つの文化の発展段階を計る尺度として愛の進化度というものが考えられることであ

る。わたしはこの研究を読み了つていつのまにか日本の文化の發展段階について考えさせられてしまった。つまり、この本のなかに動物愛と人間愛との接觸の場であり、前者が後者に感応する契機であるところの家畜の意味が論ぜられているが、エロスとアガベのあいだにもこの比例が成り立つとすれば人間がどこまでも人間であることをやめないでしかも神の愛との感応の可能性というものが考えられるのである。日本の文化がこの可能性を開く方向にむかっているか或いはその反対の方向にむかっているかという点から日本文化の本質がもつとはつきりするのではないかと空想したりしている。

外国書のことはいずれにしても、最近本誌と同様に各大学の英文科や教養科を中心とした雑誌や機関紙がさかんに刊行されているようだ。批評という柄でもないが、寄贈を受けたお礼の意味もこめてそのうち二三について簡単な紹介をしておきたい。

先ず東大英文科の新しいゼネレーションを中心として「オーベロン」が再刊されたことを喜びたい。巻頭の「不安の文学について」(加納秀夫)は William Sanson の *The Face of Innocence* を主として現代の文学の不安や人間のディレンマの問題を考えている。松村達雄氏の Elizabeth Bowen の紹介、尾上政次氏 Faulkner の *Absalom, Absalom!* の紹介とともに英国小説の新生面が紹介さ

れているが、古いところでは「虚栄の市」(海老池俊治)トロロプ雜感(辻茂雄)がある。少くともこの創刊号では英国の小説が関心の中心にあるようである。編集子の言葉にもあるように「本号は何となくウォーミング・アップ不足といった感じだが、同人雑誌の創刊号ではやむを得ない事情であろう。次号を期待したい。

「英文学―研究と鑑賞」、第六号(早稲田大学英文学会)この雑誌は活字の組み方もゆつくりしていて気持がいい。尾島庄太郎氏の「アノルドとケルト的稟質」が巻頭論文でその他アレイク、シンゲ、ジョイス論などが見られる。本間久雄氏の隨筆「冬扇録」はアーサー・シモンズの懐古談で、筆者も年齢の関係で同じくシモンズは懐しい文人の一人なのだが、筆者不見のシモンズ発狂後の回想記『懺悔録』の紹介やロンドンでのシモンズ会見記などは特に面白かった。「英文学思潮」第二十六卷第二号(青山学院英文学会)巻頭に松原巖氏の「人間及び詩人としての Robert Frost」がある。その他倉長直氏の「The Seven Deadly Sins」と題する精細な研究論文や岡本通氏の「英詩の鳥」など含まれているが、全体として通覧して統一された個性に乏しい感じをまぬがれない。

「近代」一九五三・一一号(神戸大学近代発行会)この雑誌は英文学だけの雑誌ではないが巻頭の寺田建比古氏の「ローレンスに於ける結合の問題」と題する三九頁に及ぶ力作が載っている。これは恐

らくは本邦で発表された最初の真剣なローレンス研究といつても過言ではないであろう。これはローレンスのヴァイタリズムを素朴な原始主義や肉体主義として理解する通説への反駁でもあるが、それは単なる反駁でもなく、いわゆる研究でもなく、充分なドキュメンテーションの上に立てられた信仰告白でもある。ここで充分な紹介は到底不可能であるが、英文学一般の研究方法の上にも新生面を開くものであろう。同じ著者の他の研究とともに単行本としてまとめられる日を期待してやまない。

最後に、毎号寄贈される「英語青年」の二月号を何げなく開いてみると、巻頭に上田辰之助「虫の好かぬ人々」という何のことかわからぬ記事が載っている。有名な一ツ橋の経済学者と同名異人だろうかと思つて読んでゆくうちにこれは途方もない本ものだとわかつて驚嘆した。「虫の好かぬ人々」とはラムのイデオロム Imperfect Sympathies の邦訳だと知つて感心し、さてはこの imperfect という単語についての例の御談義かと思つて読んでゆくうちに、なかなか以てこの経済学者の英語への打ち込み方はいうまでもなく、ラムその人の人物の核心への打ち込み方が完全も完全の最上級であることに再嘆し、さらに第二節へ移ると、なにその単語講釈は未だ序の口で「由来乞食と学者は序文(プレフェース)が長いもの」という名句を教えられ、この論文はラムの三大鬼門——スコットランド

書評を兼ねて

人、ユダヤ人、クエーカー教徒のことを論ずるらしいことがわかつて三嘆した。さてこの三人種が何故ラムから完全な同情を受けなかつたかという点、それがラムの下手な金儲けの技術にかけては申し合はせたようにこの三人種がみな天下の達人だからだという。なるほどラムと経済学とはかういう風に見てくれれば決して無縁ではないなと感心した。最後に感心を通り越してカプトを脱いでしまつたのは、どうやらこの論者は英文学をやるものは近代英国史の最大事実、「産業革命」というような問題を「虫の好かぬ」問題として敬遠しているのではないか、もしし同情を寄せては如何と英文学者に勧告しているように思えてならないことだ。更に思い過しかも知れないが、英文学者たるものは、さういふ種類の同情を示すことによつて、英語そのものへもつと同情を示せとお叱りを受けている気がしてならないのである。論より証拠、この経済学者の英語英文学に関する博識はもちろんのこと、英語の名文句の引用の仕方そのものが抜群の出来栄を示している。こんな実物教訓を突きつけられると困つたことはわれわれ英文学者と称せられる者の大部分はみな imperfect scholars に見えてくることだ。